

トンバイ塀

トンバイ塀は有田の町の各所に今も残っているが、中でも一番の長さで保存状態の良さを誇る塀を内山（うちやま）地区の裏通り沿いで見ることができる。トンバイ（語源不明）とは、中に室を設けた伝統的な登り窯（のぼりがま）を作るために使われた耐火レンガのことを指す。登り窯は、江戸（えど）時代（1603～1867）に有田で広く使われていた。窯焚きの火の熱で構造が徐々に崩れてしまうため、頻繁に新しく造る、または修理する必要があった。構造的に損なわれたレンガは新しい窯に使うことができなかつたため、陶工の自宅や工房を囲む塀を作るために再利用された。

トンバイ塀の多くは、転用されたレンガを見えないようにするため壁土や漆喰で覆われている。またその上は、雨を防ぐためにタイルで覆われている。塗布を定期的に行わないと、壁土は剥がれていき、その下の赤土とトンバイが露出してしまふ。しかし最近では、有田の町でこれまで陶磁器が再利用されてきたことをアピールする動きが高まり、トンバイを隠さず見せるようになっている。レンガの他に、陶磁器片や古い窯道具も塀の中に目にする事ができる。

塀の長さは以前は数キロにわたっていたが、現在は一部の地区にのみ残っている。磁器生産技術の発達に伴い、登り窯は今ではもう普及していない。そのため、トンバイ塀に使うレンガも出なくなり、新しい塀を作ることも難しくなっている。有田町では、トンバイ塀が壊れた際、廃品と伝統的なレンガ積み技術を使って再建を行っている。